
くらでれっ！

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くらでれっ！

【Nコード】

N2210X

【作者名】

桜

【あらすじ】

罰ゲーム。それは至高の感覚。

負ければなにがあるか解らない。そんなエキゾチックな行いは、若い俺たちには刺激的だった。

そんな俺の、バカな高校生のちょっとした罰ゲームが始まりだった。

暗い女の子を笑わせる！

お笑いに生きるバカな少年が自称幽霊娘を笑わせようと悪戦苦闘

する話。

感情を見せない少女と感情しか見せない少年の物語をご覧ください。

一話め。始まりは罰ゲーム（前書き）

騒がしい教室の中。

今は休み時間。

高校生という職業柄、俺達は狭い教室という四角に詰め込まれて、何時間も固い椅子に座っている。

それで綺麗なねーちゃんが目の前で踊っているっていうなら喜んで何時間もいるんだが。

何かが難しいのか解らんご鞭撻を大人達から聞かされる。

円の面積だとか式の展開だとか、一体何の役に立つやら……。

そんな退屈を吹き飛ばすように休み時間は仲間達と思いつきり遊ぶ。教室の、それぞれの仲間達が好きなように大きな声で笑い、騒ぐ。

俺が一番好きな時間で、一番楽しい空間。

そんな楽しい中で、たった一人だけ。

笑顔を見せていない少女が居たのに気付いたのは。

小さな悪ふざけがきっかけだった

一話め。始まりは罰ゲーム

ババ抜き。

机をみつつ程合体させ、大きなテーブルを作り、真ん中には既に歴戦の勇士達が旅立ったのを示すであろう無造作に積まれたトランプの束。

ゲームは既に山場へと向かっていた。

罰ゲームを目の前にしての緊張感……たまらない。

五人の内、三人は既に上がり、ニヤニヤと上から目線でこちらを伺っている。

残るは俺を入れて二人。

目の前の野郎は残り一枚。

俺の持つのは残り二枚。

片方は嘲笑うかのように笑うピエロのジョーカー。

片方はあらま可愛らしいハート。

まるで愛を示すかのように……そう。ラブアンドピース！

信じるゼツ！ブラザー！！

なんて見ず知らずのトランプに思いを託す。

兄弟なんて別にいないんだ。

特に根拠も無く、対峙する悪友にニヤツと笑って見せる。

すると悪友も同じようにニヤツと笑う。

多分こいつも根拠は無いんだろう。

悪友が手を伸ばす。

罰ゲームはどちらに転ぶのか。
右の希望か左の絶望か。
緊張感に背筋をゾクゾクさせてくれる。

さあ来いよ馬鹿野郎。

たまんねえ緊張感に、もっと俺を楽しませろよ!!!

男が手に取ったのは

俺の愛する希望だった。

残ったのは嘲笑うかのように俺を見上げるジョーカー……。

や………負けるとは思わなかった。

四つん這いで落ち込んでいる俺に対し、その周りをグルグルと回っている悪友たち。

「ばっつげーむ！ ばっつげーむ！ ばっつげーむ！ ばっつげーむ！」

高らかな声を挙げながら腹の立つ踊りを見せて来る。

つく！ 殺したい！

ばっつげーむ！のリズムに合わせて「カモン！」とか「イエ！」とか合いの手を入れてる奴を特に殺したい。

しかしここは男として堂々と罰ゲームを受けよう！！

「さア！ 煮るなり焼くなり好きにしゃがれ！ 俺は逃げも隠れもしない！」

「……Mだ、コイツMだ……」

堂々と男らしさを見せたのに妙な空気が流れたのは何故？

悪友たちは俺を横目にあーでもない、こーでもない、とどんな罰ゲームにするか話し合っている。

俺は黙って悪友たちを遠くから眺める。

ホントなら俺もあの輪に入って如何に苦しむかというギリギリの罰ゲームを考えていたのに……。

残念な気持ちのため息に乗せる。

しかしこんな日常が嫌いじゃない。

「よし！ 決定！！」

集団の一人が大声を出した。

それと同時に他の悪友も悪い笑みを俺に向ける。

さア！ どんな罰ゲームでもきやがれこのヤロー！！

笑いの神と言われた俺が無様に貴様らの期待に答えてやろう！！

大声を張り上げた悪友が人差し指を大げさにびしっ！ と突きだした。

その指先の先は俺を通り越して後ろを指していた。

釣られて振り返った先に。

一人の少女が居た。

騒がしい教室の中、一人静かに椅子に座るショートカットの少女。

窓際という位置を見せつけるかのように窓を開け、風を浴びていた。

窓を一人占めしているようで少しムカツク、そして何よりも暗そうな表情に苦手さを思わせた。

彼女は最近越してきた少女だ。

名前も良く解らないし、越してきて緊張して誰とも触れ合えていない、というより自分から孤立している感じだ。

そんな彼女を指差して一体何のつもりだ？

良く解らない、といった表情の俺に悪友達は同時にニヤツと笑って見せた。

「あの女を笑わせて来い！！」

「え」

何と無茶な注文を……確かに罰ゲームらしいが……。

自分でも言うのもアレだが人を笑わせるのは得意中の得意だ。

しかし、あの女がこっちに越してきて笑った表情を見た事が無い……。

少し気圧された様子を見せてしまった俺に楽しそうに悪友達は笑う。

「何だよ？ 無理なのかア〜？」

こんな風に言われればミスターお笑いの俺としては引き下がるわけにも行かない。

「っは！ こんな朝飯前と言わず昼飯前よ！！」

つまりちよつと時間が掛るかも、という意味を込めたのは秘密だ。

「よし！ 決まりだな！！」

悪友達を背に、俺は女の方に向かう。

後ろでニヤついている悪友達はどうせ無理とかほざいているかもしれないが……この一発で終わらせてやる！！

女の机の前に行くと、ショートカットの女は気付いたのか視線を俺に向けた。

む……近くでみると意外とかわいいじゃないか……。

ちよっと思春期っぽい思いが出ってしまったが首を振って気を引き締める。

行くぜ……俺の超どきゅうの一発芸。

貴様は無表情、窓際の笑わない美少女から窓際の爆笑女へとあだ名を変えるのだ！

特とご覧あれ！ 俺の悶絶究極必殺！！。

訝しそうな女の視線にも挫けず、俺は徐にズボンを脱ぎ出した。

騒がしい教室が静まり帰り、俺の方に視線が集まっているのが解る。

空気が固まるとはまさにこの事。

後ろの悪友達のバカ笑いだけが救いである、そして原動力として俺を揺り動かす！！

下のズボンが無ければトランクス一丁なわけだけれど、この格好で「キヤー！ ヤダー！ 脱いでる〜！」何て在り来たりの反応なぞつまらん！！

そんな反応などされる前に俺は新たな行動に動き出す！

未だ固まって座ったままの女の子にツグ！ と、親指を立てて見せ、一言。

「下半身、始めましたッ！」

後ろで俺の言葉に更に大爆笑している悪友達。

ツフ！ お前らの笑いなぞ無用！！ 今はこの子の笑顔が欲しいのさー！！

何てカッコいい感じを出しつつ、白い歯を女の子に向けてニカッ！ と笑う。

さア来い！ ビッグウェーブ！（笑いの波）

どんな突っ込みでもモーマンタイ！ 何を始めるの！？ 何故下半身！？ 何で自信満々！？ どんな突っ込みでも対応してやるぜエエエ！！

テンションばり高の俺は、いつ女の子が笑いながら突っ込みをするのか待っていたのに、女の子はいつまで立っても笑い声を挙げなかった。

いい加減笑ってくれないとズボンを穿けないんだが……いい加減に寒い。

そう思った瞬間、女の子の口が動いた。

「……キモ」

その言葉と共に俺の心にピシッと亀裂が入った気がした。

「……へ？」

毀れた言葉は疑問系、まさかこんな事を言われるとは思っていなかった俺の精神的ダメージは絶大らしい。

固まっている俺に、もうひとつのダメージが襲った。

女の子の机が俺の股間に向けて体当たりを仕掛けてきたのだ。
固まっている俺は当然避けれるハズも無く。
木の堅い部分が俺の大事な所にぶち当たった。

クリティカルヒッツ。

「っおっふっ！」

変な声が出た。

座っていた女の子が机の下側を思いつき蹴り上げたのだ。
幾ら女の子とは言え、足の力は腕の3倍、そして何より俺がトランクス一丁である事を忘れてはいけない、ダメージを4倍に加算して良いだろうか。

いつものズボン装備（防御力10）であれば多少は生きながらえたとこのににににに！！

トランクス（防御力1）ではほぼすっぴんと変わりませんて！！

固まっていた思考から1、2秒かけた復活から、猛烈に襲ってくる痛み。

男性諸君ならこの気持ち解ってくれるだろう。

俺はトランクス一丁のまま、その場に崩れ落ちた。

薄れゆく意識の中、少女が俺を見下ろしているような気がした。

一話め。始まりは罰ゲーム（後書き）

溜めていた小説を出していく予定です！
モバゲー。エブリスタでも更新中です^^

「二話め。目覚めと共に見た悪友が最悪なわけだが

「おい、オーイ、起きろー」

誰だ俺を起ここそうとする奴は。

大切な睡眠時間を取らないとお肌が悪いぜ？

「てめ、女にノックアウトされてんじゃねーよ」

呆れた声に俺は寝ぼけながら答える。

「ウルせー……俺の眠気を妨げるならお前をノックアウトしてやるーか、今の俺の幸せを味合わせる為に眠らせてやるーか」

「おまつ……結構元気じゃん！」

呆れた声すらも鬱陶しく思い、寝返りをうつて声とは別の方を向いた。

「俺の下半身はいつも元気だこのヤロー」

「嫌、お前の下半身が元気なのはおかしい……」

なぜおかしいんだ？ 俺の息子は毎日文字通りピンピンして……
そついや何か痛いような。

しかし、その痛みよりも眠気が勝っていた。

「……」

それ以上男は何も言ってくる様子は無い。

まったく、誰か知らねーが眠りを妨げやがって……。

手を頭の後ろで組んで枕にしながら再び安らかな眠りに……と。

した瞬間だった。

腹部に強烈な痛みが走った。

「うおぶほあ!？」

面白い声が出た。

「やっと起きたかこの野郎」

「ぐうおあああああああ!！」

俺に何かしたであろう男が平静な様子で何か言っているが良く聞こえては居ない。

叫び声を挙げながらその場をゴロゴロと転げまわる。

マジ余裕無し。

慌てて起き上がり、お腹に乗った物を見た。

レンガ。

おい!?!死んだらどうすんだよコラァ!?!

「てててててメェ! 俺のプニプニお腹に何て事しやがんだ!！」

「ッフ! 毎日鍛えて無いからそうなんだYO!」

そう言っただけなのは、美しいポーリングを決めて筋肉を強調している悪友の一人だった。

何で上半身裸なんだコイツは。

「……あれ?」

俺は小さな声を挙げた。

教室の床で眠っていた。

「やっと目覚めたか、世話やかすんじゃねーよ」

上半身裸の悪友が新たなポーズに切り替えながら、呆れた声を漏らす。

「……………良く覚えている」

鮮明になってきた。

そつだ、俺は素晴らしいボケを殺され、あの女に大事なマイサン！（下半身）を攻撃されたんだ！！

「嫌ー、男の弱点を狙うとは未恐ろしい女だぜ……………」

「嫌お前の筋肉も恐ろしいわ」

これ見よがしに筋肉を強調する友人は筋トレマニア。筋肉をこよなく愛する悪友は高校生とは思えない美しい肉体をしていた。

しかしムキムキ過ぎてぶっちやけキモイ。

「ツフ……………俺の筋肉の恐ろしさわ誰よりも俺が知っているさ……………」
「やだこの子、自分に酔ってるわキモ！」

「後お前はポーキング決めながらじゃないと喋れないのか」

悪友は2、3秒に一回くらいの割合でポーズをかえている。
一分くらい見てたらコイツの全てが見れるんじゃないか？

「悪いな、これが俺のアイデンティティー！」

そつ言いながら友人は背筋を見せ付けてくる。

「……………」

若干引いた。

「……触っても、良いんだZ E?」

あらこの子、俺が筋肉に見惚れてると思ってるわウザ!

「筋肉馬鹿、お前はちょっと黙っとけ、大体起こすのにレンガなんか使ってんじゃネーよ」

そう言ってくれたのは別の悪友、髪を掻き揚げる仕草が素敵過ぎる言つなればイケメン野郎。

ムキムキ悪友が少し唇を尖らせる。

「ウルセー俺はお前にもつと腹筋を鍛えて欲しくてだな……」

「俺はお前なんかの体はいらねエ!!」

拙劣な俺の叫びは察して欲しい。

「オーライ、てめーの気持ちは解ったから立てオラ
イケメンは俺に手を貸して立ち上がらせてくれる。

俺の数多い悪友の中でもコイツは結構イイ奴。多少腹黒いが……。

「で、どーすんだよ?」

筋肉野郎が立ち上がった俺に疑問符をブツける。

「どーするって何がだよ」

未だに筋肉を見せ付けていることに嫌な表情を見せながら俺は疑問符を疑問符でブツける。

「罰ゲームに決まってるだろーが」

答えたのは筋肉やるうでは無くイケメン野郎だった。

あ？ 罰ゲームが何だよ。

「提案したのは俺らだけだよ、ありゃ一筋縄じゃいかねーよ」
それに同調するように筋肉野郎もウンウンと頷いていた。

「あの女、俺の筋肉にも反応しねーんだよ」

「嫌、お前の筋肉はどうでも良い」

俺の変わりにイケメンが瞬時に突っ込みを入れてくれた。
ボケ側としてはあまり突っ込みを入れたくないので助かる。

……つまりこいつ等が言ってるのは罰ゲームを止めようか？
という話し。

実行できないのでは罰ゲームにならねーし、所詮遊び程度の罰ゲームだ、態々やる必要は無い。
そんな風に言ってる感じだ。

……だけだよ。

俺は意味深にニヤツと笑ってみせる。

「この罰ゲーム最後までやらせて貰うぜ？」
イケメンと筋肉は少し不思議そうな表情をする。

「気に入ったぜ笑わない女」

イケメンと筋肉は俺の言葉に今度は呆れた表情を見せる。
わけわかんねエ悪友しかイネー様に、俺もわけわかんねエ一人。
言うなりにや類友と言う物。

それが解ってる悪友達も無理に止めようとする気は無いらしい。
俺が人を笑わせるのが大好きな人間だって事を知っているから止める必要も無いのかもしれないが。

待ってるよ無愛想女!!

その鬱陶しい無表情づらを最高の笑みに変えてやる!

三話め。お化け+ロベタ+電波IIアゲハ

「ふう……」

小さな声が漏れた。

無意識に出た声は多少の疲れから出た声。
階段を上るだけで息が荒くなる。

昼休み。

一人私は屋上に来ていた。

小さなベンチに腰掛け、空を仰ぐ。

燦々と照り付ける天気を目を細め、今度は辺りを見渡した。

誰も居ない屋上はとても静かで、世界が止まった様な錯覚すら陥った。

しかしそんな筈が無いのが解っているのは、手に持つ小さな文庫が風で揺らぎページを勝手に捲るからだ。

全く、教室では突然変な男が話しかけて来たから気分が悪くなっ
た。

私なんてほつといて欲しい。静かに、そつとして置いてくれないの？

汚らしい……

そんな風に思う私の思いを裏切る様に、屋上のドアが開かれた。
 Bannon! と大きな音を立てて素敵な屋上の静穏が汚される。

ドアを開けたのは、先程私が汚いと思った張本人だった。

ニヤツと笑うこの男に対して、私は何の気持ちも込めない視線を向けた。

私に何を期待したんだろう、この男は。

イケメンの情報で少女は屋上上がったと聞いた。

猛烈な勢いで階段を駆け上がると、そのままの勢いでドアを思いっきり開けた。

大きな音が木霊し、明るい日の光が差し込まれる。

その先にベンチに腰掛ける少女が居た。

ついクセである嫌らしい笑みを浮かべてしまう。

ターゲット、確認!!

「よー！ さっきぶり！」

づかづかと少女の前まで近づくと馴れ馴れしく話しかけてみる。

何気無い会話から笑いへつなげてやる！

「……………」

俺の元気な挨拶に返す事もせず感情の無い視線を向けられてしま

った。

こ、困る反応するなコイツ。

「行き成り急所蹴り上げるなんざヒツデーよな！」

「……」

「俺！——宮！いちのみや 宜しくなー！！」

「……」

「イヤー、さっきは行き成り下半身出した俺も悪いよな、もっとソフトな笑いが好きだった？」

「……」

「……なアなんで一人で居るんだ？ 皆と楽しく騒ごうぜー！」

「……」

「……な、なア」

「……」

か、会話のキャッチボールが出来ねエエエ！！ 俺の会話というボールを全てスルーしてやがる！！せめて取って！！

何気無い会話から笑いをと思ったのに、会話すら成立していない。これは一筋縄じゃない！！

「や、あ、あの……君さー可愛かわいいよねー！ そんな俺の苗字は河合かわい

「!」

「……………(ペラッ)」

うおお!? 本読み始めちゃった!

完全に無視かよ! っていうか慌てすぎて変な事言っちゃったじやねーか!! 別に俺河合じゃねーし!

クッソオ! どうしたら良いんだ!! 笑わせる依然に話を通じなきゃ不可能じゃね!? このなんちゃってクールビューティーめ! こうなったら物で笑わせてやる! 俺はモノボケまで出来る完璧芸人さッ!

そう思いつつ何か無いかと辺りを見渡してみる。

流石は屋上……何もねえ!

ん? 屋上の薄く開いたドアから見える二つの影。

悪友の二人組みだ。

まさか俺が笑わせれるかしつかりと監視しているのか!?

クソ野郎共め〜!

一人は誰も見て居ないはずなのに上半身裸でポーズングを決めていた。

もう一人は隠れているつもりがあるのか携帯で電話をしている。

あいつ絶対また女と電話してやがるよ……クソイケメンめ……。

というかあの馬鹿二人とも見てねエ! 何しに来たんだあいつ等!

っは!? しまった悪友共の有り得ない行動に突っ込みを入れてしまっていた!

慌てて少女の方に向き直る。

お、おおう……本のページが結構進んでいらっしやる。

「お！ おい！ 人が話しかけてんだからちよっとは反応しろよな
！！」

少し苛ついて（嫌俺も一瞬無視してたけど）つい気の強い言葉を
掛けてしまった。

すると、少女は再び顔を挙げて俺の方を見た。

透き通った二つの瞳。

覗きこむように俺を見る。

幾ら頭の悪い俺でも女の子に見られれば変な感じにもなる。

「な、なんだよ……」

強気ながらも少し意地を張るような弱弱い声になってしまふ。

「河合君、私に何のよう？」

え、俺、河合じゃないんですけど……確かにそう言ったのは俺で
すが。

取り合えず話しかけてくれたのは一歩前進だ！ 今は河合でも何
でも良いや！

「仲良くしよーぜ！」

そう言っって元気良く親指を立ててみる。

「……？」

軽く小首を傾げられてしまった！

なんつちゅー子だよ！ ストレートに言ったら「ヤツダなにそれ
」とかクスリ的な感じなのを期待したのに！

「えっと……君さ」

話しかけようとする俺に、少女は少し考える素振りを見せ、片手を本から離れた。

離れた手で自分を指差し小さな声を溢す。

「アゲハ……」

あ、ああ……名前ね。

君って名前じゃないもんな。

しかし珍しい名前だな。

「アゲハは、さ……さっき俺の股間に攻撃してきた時みたいな感じの方がまだやりやすいんだけど」

少し間を空けて、アゲハは口を開いた。

「あれは驚いただけだし……」

驚いただけで男の急所攻撃するって酷くね!?

……いやとりあえずしゃべるし。

「それとも……股間を蹴らりたいの？ 不思議な人……」

「別に蹴られたくはネーよ!! 何だ! そうまでして俺をMに仕立て上げたいのか! 仕舞いにゃホントに目覚めるぞコラ!」

「目覚めるんだ……」

「目覚めねーよ!」

喋りだしてくれたのはいいが……「こ、この子と喋っていると、疲れ
る……」

「……そう」

そう簡単に言つと少女はまた視線を本に落とした。

あ、あああ……お、怒らしたか？

チッキシヨー！ 折角話しかけてくれたのに……。

再び玉投げから始めるんかい！ いつ取ってくれるか解らない玉

(会話)をまた投げ続けなきゃイカンのか！！ 一人で玉(会話)

投げるのがどんだけ辛いか！！(ていうか独り言)

そんな風に不安でワタワタしていると、本に視線を落としながら

少女が小さく零した。

「ねエ、河合君」

お、喋ってくれた。つていうか俺河合じゃ無……。

俺の気持ちなんて露知らず、少女は続ける。

「お化けつて……信じる？」

……は？ 何だそりゃ？ ギャグか？ 電波ギャグなのか？ なんだソツチ系のギャグならいけるのか！？ な

「信じるも何も俺が幽霊だからな！」

そう言つて親指でビシイ！と俺を指差す。

歯を見せてニヤツと笑つて見せる。

「……」

「……」

す、すべったああ！！ ヤダ何この空気！？ 屋上の肌寒さがリアル過ぎて辛いんですがががが！！

「……え、ホント!？」

ワントンポ遅れてアゲハは俺に視線を向けた。

あれ!?! ここ喜ぶトコじゃないよ!?! 俺派手に滑ったんだよ!?! 突っ込もうよ!

「河合君が頭ぶつとんでるのって幽霊だからなんだね……」

「今そこはかたなくキツイ事言われた!?!」
「っていつか俺の名前は河合で決定なんだ……」

僕の言葉にアゲハが首を傾げた。
「幽霊なのに傷ついてるんだ?」

「いや俺ってば幽霊じゃねーし」
溜息を零しながら俺はそう言った。

その言葉に幽霊娘は何故か明らかな落胆を見せた。
「何だ……違うんだ」

当たり前だろ! という俺の心の突っ込みを他所にアゲハが続ける。
何でボケ役の俺が突っ込みばっかやらされなきゃならんのだ!!

「私と一緒にだと思ったのに……」

「ん? え? 何?」

……何言ったこの女?

「私と……一緒にの幽霊だと思ったのに」

「……ああ! 幽霊! へえー! アゲハってお化けなんだー!」

アゲハが小さく頷く。

「幽霊って足が無いアレだろ？」

アゲハが小さく頷く。

「そんで夜に出てきてうらめしや〜って言うあれー！」

アゲハが小さく頷く。

「へえー幽霊かー！ へえー幽霊！ へえー……」

アゲハが小さく頷く。

「……んなわけねエじゃん！！」

4行分いっぱい使ってノリ突っ込みをさせて頂きました。

難攻不落の笑わない美少女は、自称幽霊だとほざく……電波女でもあった。

四話め。電波娘に宣戦布告

「……信じてない……感じ……」
無表情な顔を少しだけ歪ませてみて、めいいっぱい不快だと主張してきやがった。

「あつたりまえだ！！ 何処にこんな実体的な幽霊がいるんだよ！」

「……ここに」

「うおい！」

無意識に突っ込みの姿勢を取ってしまう。
何なんだこのわけ解らん幽霊女は！？

「大体お前毎日飯食ったり授業受けたりしてんじゃねーか！！ 幽霊が飯食つか！？ 学校通つかア！？」

「……幽霊の感性は人それぞれ」

「じゃあ何か！？ テメーの感性じゃ幽霊は飯も学校も当り前つか！？ ありえねエ！ ありえねえぜ！！」

馬鹿らしくなって来たぜ！ こんなのと付き合ってられつかよ！
人を小馬鹿にしたような色の灯らない瞳に余計苛立ちを覚えた。
そんな瞳でそんなふざけた言葉言われ続けても面白くもクソもネ
ーって！！

沸々と込み上げる俺を他所に、幽霊娘は再び口を開いた。

「後、幽霊には感情が無いの……」

「……感情？」

その言葉で、俺の込み上げて来た怒りが止まった。
コクンツと小さく頷いてアゲハは続ける。

「うん……笑いも、楽しさも、悲しみも、怖いのも、苦しいのも、辛いのも、夢も、希望も、全て無いの」

……その言い方は、それがまるで当り前かのように、どうでも良いような言い方。

夢や希望まで感情に入れるのは変じゃないか？ と少し思ったが俺を動かした部分はもつと最初の言葉にあった。

「……つふーん？ 感情が無いんだ？」

アゲハはまた小さくコクンと頷いた。

彼女は無表情なまま。

対する俺の表情は一気に変わっていった。

怒りなんてもうそこには無い。

新しい玩具を見つけた子どもの高揚感が変わりに募った。

気持ち悪い笑みが浮かぶのはクセだから仕方無いじゃない。

「っじゃーあれだ！ 俺がアゲハを笑わしゃー幽霊である事は否定されるわけだ……」

「……そうね」

「決めたぜ……俺がお前を絶対に笑わせてやる……お前のそのけったクソ悪い表情を満面の笑みに変えてやるよ……」

ビシイ！ と人差し指を向けた。
本来人は指でさしちゃいけないがコレばかりはささずにはいられなかった！！

「……そうね、その言葉が面白いわ。腹が抜れるわね」

そう言いながら全く変わらない無表情に、バツチリと皮肉が込められているのが良く解る。

じょーつとーだぜ！！！！

その生きてねーみてーな変わらない表情を、さいっころー！ の笑みに変えてやんぜ！！

硬い決心を込めた時、タイミング良くチャイムが鳴った。

折角良いタイミングで始まったのにソレはねーよ。

なんとなしに残念に思うが、時間が来たのなら教室に帰らなくては……俺は以外に優等生なのだ！

「ま、楽しみにしておけよ！ まったな！！」

それだけ言っただけ俺は踵を返した。

しかしどうやって笑わせようか……一発ネタでも駄目でトークでも駄目だったし。

そろそろ私も戻ろう。

河合君は軽く手を振りながら屋上の降りるドアから出て行った。

……不思議な人。

私なんてほっとけば良いのに、何で私に関わろうとするんだらう。どうせ私は居ても居なくても変わらない存在なんだから……。

ドアを開けて階段を降りる。

そういえば……『またな』何て久しぶりに聞いたかな。

誰も私なんかともう一度会おうなんて思わないのに。

………ほんと不思議な人。

五話め。人気者になりたい。なり……たい……orz(前書き)

「くっそお〜！ あの女なんで笑わねーんだよ！」

あれから一週間。

あんな啖呵を切ったは良いが結局笑わせることは出来て居ない。

言っでは何だが俺は凄く頑張った。

だがあの女の無表情は崩れない。

まるで俺がスベっているみたいで精神的にも死にそう……。

「何だ？ もう諦めたのか河合君」

そういつて頭を抱えている俺を嘲笑うかのように見下ろしているには筋肉。

クソ、精神的に追い込まれるときに暑苦しい奴が来やがった！
っていつか俺の名前は河合じゃない。

「どうしたんだ河合君、何悲しんだ河合君、そういう名前で呼ばれてどういふ感じだ河合君河合君」

続いて出てきたイケメンもニヤニヤ顔で幽霊娘が言い出した俺の間違った名前を連呼する。

いや言い出したのは俺だが、まさかココまで発展するとは予想していない。

「だ、誰が河合だコラア！ 俺にはちゃんと『一宮 甲徒』^{いすのみみや} ってい
う異界に呼ばれても可笑しくねーイカした名前があんだよ！！」

「……イヤお前がつつり名前負けしてるよ、河合の方が絶対合ってるわ」

「どーゆー事だコラア!!」

確かによく名前だけ聞いたらカッコいい残念な感じが可哀想だね。とか言われるけど!

誰か俺を最強になれるような異世界に呼んでくれエエエエ!!
そーいうのが良いんだろ? んん!?

……最早俺は誰に言ってるんだろ。

取り合えず協力だ……誰かに協力してもらおうしかない!

五話め。人気者になりたい。なり……たい……orz

「えー、皆聞いてくれ！ あのクソ生意気な女！
影宮かげみや 阿夏羽あけはを
笑わせなければならぬ！！！」

ポチ。

俺の一言で、ワー！ という歓声が沸き立つ。

尊敬されている俺の咳払いと共に歓声は静まり返り、俺は続ける。

「俺一人では奴を笑わせることは出来ない！ 皆！！ 俺に力を貸
してくれエエ！！！」

ポチ。

そして再びの歓声。

『良いぞー！』 『俺達で笑わせるんだー！』 『アンタの為なら死ん
でも良いぜー！』

ツフ……この俺に対する歓声……人気者は辛いぜ！ 何で笑わす
だけで死ぬ事になるんだ？ という突っ込みは無しの方向で。

「……何やってんだお前？」

歓声に酔いしれている俺に無粋な男が声をかけてきた。
イケメン野郎め。一体何のようだ！

「見てわかんねーのか？ 俺の信者達と戯れてんだよ……俺が一声かけてコレだ、罪な男だよな俺って」

つぶ、と意味深に笑って見せ両手で天を仰いでみせる。
そんな俺を崇め様ともせずイケメンは溜息を溢していた。

「片手にラジカセ持って一人で何やってんだって言うてんだよ、お前のせいでクラスの女の子怖がってたんだよ」

「……………」

ポチ。

無言でラジカセの再生のボタンを押す。

『イケメンは帰れ！ 何しにきやがったんだよテメー！』 『モデル奴は滅べ！ 地獄に落ちろ！』 『っていつか抱け！ 寧ろ俺を抱け！ 優しく耳元で囁け！！』

「何で最後に優しさが欲しいんだよ……………」

そっぴいながらもう一度溜息。

その溜息が俺を見透かしているようで涙が出そうになる。

「つまりアレだろ？ 他に協力を仰いだけど誰も協力してくれなかつたんだろ？」

…………イケメンの言葉に間違いは無い。

あれだ。別に嫌われてるとかじゃないから。皆もう罰ゲームとか

飽きたとか言うんだよ。

一人でこのラジカセ作るのも結構辛かったわ！！

「ウルセー！ 俺だって一生懸命やってるけど全然ネタが浮かばねーんだよ！！ ネットはやりつくしたんだよ！」

泣きそうな声で叫びながらラジカセを床に叩きつけ……ようと思っただが学校の備品なので丁寧に置いた。

「ちなみにネタって何個やったんだよ？」

そこまで言うんだから相当頑張ったんだろ？ という視線を俺に向けてくるイケメン。

……っえー確か最初の一回だろ？ 屋上のも入れて、この一週間でもやり尽くして。しーごーろくーしちーはちー……あれ、滅茶苦茶俺ギャグやったよ！？

「やりすぎて覚えてネーよ！！ 寧ろあんなだけ良く頑張ったよ俺！ プライドずたずたダヨ！！ 心折れる寸前だよ！！ なんてあの女笑わねーんだよ……」

声が小さくなって最後まで言えない……ヤベ泣きぞ。

「寧ろそれで諦めねーお前の精神力に感服、プライドねーんじゃねーの？」

イケメンの鋭い突っ込みに俺の心がさらスタスタになって行く。何コイツ死人にムチ打ちに来たの？

「おい！ もう止めるよー！ こっちは誰も手伝ってくれねー自分の人脈の薄さにブルー入ってたんだよ！！ これ以上追い込むなよー！！」

さながら遊ばれた女のような気分……楽しいと思っただことにしか

突っ込んでこない悪友しかいねーのかよ！ 遊びは一回で十分だつてか！ まあ俺もそうだけだよ！

マジ類友（笑） チキショー！（泣）

「あー、わーったわーった……手伝ってやるからそんな泣くなってい、今なんと!？」

「マ、マジかよ!？」

っパーと一気に顔が輝くのが自分でも解る。

本当に抱かせてやっても良いぞこのヤロー！

「……鼻水飛ばすなよ。 取り合えず暇だからヨ、筋肉バカも暇そつだから手伝うつてよ」

「おお！ 心の友よ！」

やはり持つべきものは友ですな！ うんうん！

「さっき心の友に向かって滅べとか死ねとか言っただけか？」

「幻聴幻聴」

手を目の前で振って作り笑いでそこは誤魔化す。

凄い目で睨まれた。

誤魔化しは失敗したらしい。

オ！ 待ってるよ幽霊娘!! ピンが駄目ならコンビで笑わせてヤンヨ

六話め。ピンが駄目ならコンビでGO！ 即効コンビ。筋バカラピリンス。(前

部屋の片隅で本を読む。

いつもと変わらない日常。

皆楽しそうにクラスで和気藹々としている。

だけど皆の瞳に私は写っていない。

それでいいの。

寂しいとかは無いの。

私は幽霊だから。

だから見えなくて当たり前なの。

なのになんで彼は私を真っ直ぐ見るの？

私はいないのよ？

彼は私の目の前にいる。

何度も何度も私の目の前に立つ。

今度は二人。

一人は大きな体を持った少年で、河合君と良く居る人物の一人。

そんな目立つ二人が私の前に現れたものだから、周りの視線が集まる。

私にまで集まる。

私は幽霊なのに、視線が集まる。

自身に満ちた河合君の輝いた瞳が……。

私は嫌いだ。

六話め。ピンが駄目ならコンビでGO！ 即効コンビ。筋バカラピリンス。

わああ、相変わらず心にグサッと来る無表情っぷりだぜ、コンビヤロー。

折角筋肉バカとコンビで来たってのに驚きの表情すら見せやがらねーぜちつきしよう。

だけだよ……俺と筋肉バカとで練りに練ったネタで爆笑させてやるぜ！

「行くぜ相棒！」

俺の掛け声に筋肉がニヤツと笑う。

「おうよ相棒！ 俺の筋肉が出番はまだかと嘶いている！」

なんで筋肉が嘶くのかとか細かい所はスルーするとして、コイツとならM1だって夢じゃねーぜ！

行くぜ！

「……どーも！ 僕達筋バカラピリンスです！」

そう！ コンビ漫才！！ これならまだ挑戦していないネタだ！

フハハハハ！ 今回こそ（笑いを）ゲッチュー（古）だぜコラア

！……！

見た感じ全く持って無反応で素敵に無表情で笑えて来るくらいに頭を傾げて意味不明という感じを出してやがる……

……ま、まだ勝負は始まったばかりだ。

「いやー！ 最近あつついですねー！！ 河合さん！！」
……この野郎。

漫才中でも名前変えずに言いやがってクソ筋肉め！
俺の表情はヒクヒクと頬が引き攣って見えているだろう。
い、今は我慢だ。

「そーですねー！ それとは関係無いですが私、熱いついでにダイエットをしようと思うんですよー！」

「おー！ いいですねエー！ ダイエットと言ったらやっぱり筋トレですよ〜」

……なんでネタと違う話出してるんだよ、何で漫才しながら筋肉ポーズしたりしてんだよ。

若干漫才と違うのに少しばかり奇立ちが出てしまう。

ま、まあいい。

「ほおほお、じゃあどんな筋トレとかがいいですかね？」

「そうですねー！ やっぱ最初は筋力をつけるわけですからいっぱい食べてですね」

「いやダイエットだって言ってるじゃん?!」

寧ろいつもの具合な突っ込みになっていたが、それでも俺の的確な突っ込みが筋肉の胸へとベチン、という具合に、手の甲をぶつけた。

気のせいかな幽霊娘の表情に本当に小さな、だが反応があった気がした。

いいぞ！ いい流れだ！ このまま出しきれ！

しかし、突然俺の突っ込みの手は払われた。
え？、と思っっている俺に筋肉バカが真顔な表情を向ける。

「俺の大胸筋に触れるな」

筋肉がさつきまでの明るい感じから一気に真顔に変貌、え、なにこれ。

え、打ち合わせと違つくね？

え、え、ええー……。

「ま、またまた！ 何真面目に怒ってるんですかっての！」
何とか笑みを引きつりながら堪えると、筋肉の腕を軽く叩くこと
してみる。

「俺の上腕二等筋が穢れる」

そう言いながら俺の手を再びパシッと払いのける。

「え、あ……ゴ、ゴメン……」

素のマジ顔にこっちまで素で謝ってしまう。

「……」

「……」

二人して俯く。

って、いやいやいやいや!!

「何気まずい雰囲気出してんのさ!! 打ち合わせと違うよ!!?」
漫才つてのは突っ込みでドツ! と笑い取るんじゃないの!! 何
台無しにしちゃってくれてんの!?!」

「す、すまねエ! つい俺の美しい筋肉に触れられて怒っちまった
! 全くクールな俺を怒らせる何て罪な筋肉さんだぜ……」
勝手なこと言っつて勝手に見惚れてやがる。

「だーから! その自分の世界に入るのを止めいと言っつてんだよ
!!!」

怒りの叫び声を発した後、チラッと幽霊女の方をしてみる。
馬鹿らしいと言わんばかりに欠伸をしている。

……一応は見てくれているようだ。

つく! これじゃピエロも良いところだ! パターンBで行くし
かねエ!

「もういい! 俺がボケるから突っ込みやってくれ!」

「おお! 今度こそ任せろ! 俺の筋肉を活かして突っ込みで笑いの
波を作りだしてやんぜ!」

突っ込みに果たして筋肉が居るのかどうか全く持って理解に苦し
むが今はんな事どうでもいい! 頼むぜ筋肉馬鹿!!

六話め。ピンが駄目ならコンビでGO！ 即効コンビ。筋バカラピリンズ。(後

ドメスティックバイオレンス内藤っていう感じの夢を見ました。
いや、は？ っとなるでしょうけど、見たんだから仕方が無い。
そして説明できない……orz

七話め。担当交代、俺がボケでお前が突っ込みで

取り合えずは仕切りなおしだ！

今度こそ笑わせてやる！ 俺の超絶ボケを侮るなよ！！

「えー。気を取り直して……最近治安が悪いですねー？」

「そーですよー最近怖い世の中ですよー」
合わせて来る筋肉に僕が続ける。

「えー、ですからこんな時こそですね！」

「こんな時こそ？」

「やられる前に自分から治安の悪い事するって言うのはどうでしょう？」

言い切った後に胸を張る。

さア来い！ ここで突っ込みが来たら爆笑必須！

笑わなくてもココから話を盛り上げて行き、最後には自然に笑う
ぐらに持っていくんだ！！

「ンなんでだよ！」

望み通り筋肉バカが掌の甲を俺に向けて振り被る。

よし！ いいぞ！ 良い感じだ！！

筋肉馬鹿の掌甲が俺の鳩尾に見事クリーンヒットした。

「……オベロハア!？」

素敵な声と共に何か出た気がしたが気にしない方向で。

「お……おま……おま……おおおおふう……」

苦しさを瞬時に突っ込みすら出来ない。

筋肉馬鹿はドヤ顔。

その後にアゲハを見た後、不思議そうに首を傾げた。

「おい突っ込んでも笑いが来ねーじゃネーか、どういうことだオイ」
そんな事を言いながら蹲って泣きそうになっている俺に蹴りを入れてくる。

「あ、当り、前……げっふ……っだ、ボゲエエ……」

流石毎日無駄に鍛えてるだけはある、突っ込みをする元気すら持っていないから。

しかし突っ込みまでココまで強いとは想定外だった。

ヤバイ。死ねる。

そんな苦しんでいる俺に上からこのブア力は寒気が走るようなことをほざきやがった。

「……んー、突っ込みが足りなかったか？」

え。

「や、違……」

七話め。担当交代、俺がポケでお前が突っ込みで（後書き）

筋肉野郎は漫才見ないみたいですね。

……面白いのに。

八話め。 作戦変更、笑顔でGO！ 作戦

「で？ 何で笑わせに行ったのにお前は顔がボコボコになってんだ？」

イケメンの言葉はごもつとも。

「……………」

どう伝えれば良いのか解らず黙っていると隣で筋肉がツフ、と小さく笑った。

「俺の筋肉の躍動が抑えられなかったのさ……………」

その言葉に、俺は顔が痛いのも忘れて筋肉に食って掛かった。

「なーにカツコつけてんだテメー！ テメーのせいでこんな素敵な顔になったんだろーが！！」

「っへ、照れるぜ」

照れてやがる！ こんなに怒ってるのに照れてやがる！？

「褒めてネーよ！！ 皮肉だよ！！ 人の顔の原型変えといて褒められたと思う頭の中はなんだ！？ 何で出来てんだ！？ そうか筋肉だろ！！ どーせ頭ん中もみっちり筋肉なんだろーがどうせよ！！」

少しムツとした様子で筋肉が威嚇のポーズを向けてきた。

「おいおい俺の筋肉を侮辱するようならば相手になるぜ？」

「じょつとーだクソツタレ！ テメーの筋肉ケチヨンケチヨンにしたらー！！」

ゼーゼーと荒い息をしながら喧嘩越しの俺と筋肉の間にイケメンが割って入る。

「まーまー、落ち着けよ、んで？ 笑わせたのか？」

イケメンの言葉に俺はっう、と詰まってしまう。

その様子にイケメンにもどうなっただかは伝わったらしい。

「駄目だったか」

「ま、まーな」

内容はどうあれ、コンビプレイも失敗。どうしたもんかな。

「……女笑わせるなんて簡単じゃネーか」

イケメンの発言に俺の眉が勝手に上がる。

「その簡単なのが出来ねーから困ってんじゃネーか！！」

「女の子にニツコリ笑いかけてみな？」

何を言ってるんだこの素敵顔面は。

「俺が笑いてーんじゃネーの、笑わせてーの！！」

「……視点切り替えて見ろよ河合、釣られて笑ってくれるかもしれ

ないぜエ？」

そういうと、イケメン野郎は素敵な笑顔を披露してくれる。

つく！ カッコいいぜ！！ ムカツク！！

「ツキヤー！ 私達の王子様が笑ったワー！」

「ステキー！！」

「こっち向いてー！」

ドア際から覗いていた女共が昭和臭い感じの盛り上がりを見せている。

このイケメンぼけなすのファンとか言う奴だ。

あーあー！ どいつもこいつもヘラヘラしやがってよおー！ イケメンが言った通り簡単に笑っちまってやがる。

……俺も笑いかけりや笑ってくれるンかね。

少し気になってイケメンのように笑いかけてみた。

「げ！！ 河合がコツチ向いたわよー！」

「こっち向いてんじゃねーわよ！ 変態野郎！！」

「死ね！ こっち見ンな！！ 視線からませただけで目が腐るわよー！！」

……親衛隊たちは各々が思う最高の敵対意識のジェスチャーと共に苛立ちを示しやがる。

おいおい、ピチピチ女子学生が眉間にしわを寄せて首切りジェスチャーまでしやがったゾ！！

……不断からクラスでバカなことばっかやってっから女子からの人望なんざこんなもんだ。

自分で言うのもあれだが男友達は一番多い自身があるのだが……

いや只の負け惜しみです くそつたれエ！

「うるっせー！！ ドブス女共！！ そして俺は河合じゃねー！！」
ドアに溜まっている奴等に向かって思いっきり悪態を吐いて見せる。

女達特有に、キーキーと叫び声を挙げていやがる。

「ちよつとオ！！ 言いすぎでしょソレー！！」

言いすぎ！？ 地獄に落ちるとか首切れるとかのジエスチャーはやりすぎじゃないの！？

それこそ男女差別だつてオイイ！！

「ちつきしょー！ 女性差別ならぬ男性差別だろうがー！ 筋肉！！ あそこのお嬢様達がお前のステキ筋肉が見たいつてよー！！」

「おやすい御用だ！！ ご希望にお応えするぜ！ マイブラザー！！」
ババツ！ と筋肉は素早く上半身を脱ぐとお嬢さん達へ筋肉ポージングをしながら走りながら向かった。

「ヘイ素敵なお嬢さん達！！ お触りは一人一回で勘弁な！！」

「ぎゃー！ 筋肉バカよー！ デカイ方の変態が来たワー！！」
固まっていた女達は筋肉が寄り付くと同時に散っていく。

「何故逃げるんだガールズ！！」
そんな事を言いながら上半身裸でキヤーキヤー言ってるイケメン親衛隊を追い掛け回してやがる。

見る奴が見たら完璧に捕まる光景だなコレ……。

それを横目にイケメンがニヤリと俺に笑いかけてくる。

「どうすんだ？ やってみるか？」

……駄目元でやってみるか。

一発芸もトークもギャグも脅かしもコンビも効かなかったんだ。

「……やってみるよ」

「おお行つて来い行つて来い！」

そう言いながらイケメンがケラケラと笑う。

顔は違っただけでやっぱりこいつとの頭の中は全く持って俺と一緒に
らしい。

類共だ。

……楽しそうだぜコノヤロー。

っへ。俺も楽しいぜ。

八話め。 作戦変更、笑顔でGO！ 作戦（後書き）

こっちの筋肉は主人公に優しくありません。

九話め。バカにならなりきれるけど、かつこよくとかはなれません。

笑いかけに行く。

口頭を挙げ、目を細める仕草。

……なにやらネタとかするのは違う恥かしさがあるなコリヤ。

遠めに幽霊娘を捕らえているものの……壁があるかのように俺はウロウロとしてしまう。

不詳ワタクシメは女の子に笑いかけるなんて恥かしいことをした事が無い。

全裸で踊れと言われれば、葉っぱ付きでスリラーだろうが盆踊りだろうが踊りきってみせる自身があるのだが。

「……お前は今とんでもなくバカな事を考えて無かったか？」

後ろから失礼なことを言われた。

振り返った先に居たのはイケメン。

何だ追いかけてきやがったのか！　こんなシャイボーイな俺を笑いに来たのかコルア！！

「ウルセー！　そういうのペンギンって言うんだゾ！　コラア！」
さっきの上手くないかないモヤモヤを散りあえずイケメンにぶつけてみる。

「偏見な。　何でお前北極生まれになっただよ」

クソがー！ 普通に突っ込まれたわー！ 何で俺はバカなんだー！
ストレスをぶつけるつもりが更に溜まったわー！！

「へっへー！ 残念でしたー！ ペンギンは南極にも今すうー！
俺が言つてたペンギンは南極の方ですうー！！」

「俺はテメーのそんな感じのムカつく会話がしたくて来たわけじゃ
ねーんだよー！！」

イケメンに青筋が立っている。どうやらストレスのお裾分けには
成功したらしい。取り合えず一矢報いたぜこんちきしょー。

「どーせ女の子に笑いかけるとか恥かしくて出来ねー、 全裸で踊
れといわれれば葉っぱ付きでスリラーだろうが盆踊りだろうが踊り
きつてみせる自身はあるのだが……。 とかしょうもねー事考えて
たんだろーうが」

一文字一区间違えずに当てられた！？

「テメーエスパーかー！！」

「ソワソワウロウロしてる後姿見てたら誰だつてわかるっツーの」
教えて天にいるお母様。

全裸でスリラー踊ろうとか考えてるのが解る後姿つてどんなので
しょうか。

いやお母様死んでないけどさ。

「ったく、じれったいな」

「俺はお前みたいに慣れてねーんだよー！」

「女の子に話しかけるなんて簡単だろーが！」

「シャイなんです。ぼくぁシャイなんです」

「全裸で踊れるとか考えられる奴にシャイなんて言葉が当て嵌まる
と思うなよ」

「……………」

暫しの無言タイム。

イケメンの言葉に俺の頭の中で審議中・・・審議中・・・審議中・・・

審議終了。

「……………いや当て嵌まるだろ」

俺の言葉にイケメンががっくりと肩を落とす。

「あーもう……………メンドクセー！！　じゃア俺が口説いて来てやるよ！　お前が凹む面を拜んでやるからな！！」

そういつて何故か俺に意味深な笑みを向けるとイケメンは幽霊娘に向かって歩き出した。

……………？　何でアイツがああ幽霊娘を口説いて俺が凹むんだ？

良く解らんが、アイツの素敵笑顔で幽霊娘が笑うのだろうか……………
見物させて頂こう。

いやでもソレであの子が笑ったら……………なんかムカつくな。

十話め。顔がよければ何でも上手く行くのは漫画だけ。

読者をしているのに、河合君がウロウロしていて集中できない。今度は何をしているのだろう……。

毎回毎回わけのわからない行動には首を傾げる。

面白いと思ってるのかしら……？

本を見るフリをしつつ、さりげなく河合君の方に視線を送ってみる。

ウロウロしていると思ったらいきなり考える素振りをし始めた。

……多分だけど裸でスリラーとか踊りたいニアとか考えてるんじゃないかな。

そうこうしているといつもの3人組の顔が良いほうで河合君に話しかけてきた。

何か会話をしている。

会話っていつか言いあい？

あ、やっぱ裸でスリラーしたいとか考えてたんだ……当たった。相変わらず河合君、頭の中ぶっ飛んでるね……。

あれ……イケメン君がこっちに向かってきた。

なんだろ……。

こっち側に用事があるのかな。

そう思っていたら、彼は何故か私の目の前で止まった。

……？ 何？ 貴方は目立つんだから近づかないで欲しいんだけ

ど……。

「あーげーはーちゃん　なーにしてんの？」

凄い良い笑顔で話しかけられちゃった……幽霊だから話しかけられたら困るんだけど……。

「……見て解らないの？　だったら貴方の瞳はゴミね……可燃物に出すべきよ」

本持つてるんだから読書以外何があるのだろう。

あ、イケメン君笑みが引き攣ってる。

「さ、さやかちゃんさー！　俺の事知ってる？」

「……………」

視線を本に戻す。

「ルイって言うんだけど……って話聞いてる？」

「お、おーい……」

何か言っているみたいだけど、特に興味が沸かない。

暫くずっと何か言われていたけど私の右耳から左耳へ通り抜けていくだけで何も聞いては居なかった。

諦めたのかイケメン君は肩を落とす素振りをして戻っていった。

……ホントなんだったんだろ。

河合君の方がまだ意味解るかも。

「駄目駄目じゃねーか！」

俺の言葉にイケメンが目を伏せる。

つといつか……

「ギャハハハハハハ！ バーカーバーカー！ ざつまぁー！！」

このイケメンが凹んでるのなんざ久々に見たが中々の残念っぷり。

イケメンの失敗ほど嬉しいものは無いと思う俺の心は狭いだろっか。

「俺の素敵な表情も何も利かねエとか……あの女マジで幽霊なんじゃねエ？」

……いや狭くないな、このボケはもっと失敗を覚えるべき。

「テメーはどんだけ自分が凄いハンサム様だと思ってんだコラ！？」

「結構凹んでんだぜー……？ 簡単だと思ったんだけどなー」

そうだったイケメンは案外素で凹んでいる様子だった。

こんな事で落ち込めるコイツの頭はやっぱり俺達バカ組と一緒になんでは無かるっか、違うのは顔だけ。

あ、後足の長さか、どうせ短足だアどちきしょー。

「取り合えず河合ーテメエもやってこいや」

イケメンの表情はすぐに変わった。

俺が浮かべるような意地の悪い笑みだ。

「は？ 失敗したの見てやるかよバカじゃねーの？」

呆れたような俺の言葉にイケメンが食って掛かる。

「俺だけ恥かくなんてやってられっか！ テメーもステキ笑顔を振り撒いてきやがれ！ もしかしたら笑うかもしれないぜ！」

「恥かいたのはお前の勝手じゃね！？ と思っただが口にするのは止めておくことにした。」

俺も恥をかきたいわけではないが万策尽きたことには変わらない。イケメンが失敗した後というのは忍びないが、だめもとでやってみるしかないか……

「……行きゃいーんだろが行きゃー」

「え、マジでいくの？ 結果わかってると余計ダセーな」

「……だから！ イケメンは！ 嫌いなんだよおお！！」

性格悪いわクソツタレ！

「……そうだ。どうせ笑いかけらんなら思い切ってネタに走ったほうが良い！！ 良いに来まつてる！！」

「某アニメよろしく無愛想女め！！ 俺の本気はまだまだこれからだぜ おるあ！」

いつもの嫌らしい笑みを浮かべると、イケメンも僕の考えが読めたのか同じ様に笑う。

「ちよっくら準備してくるぜ……」

「おう、遠くから見学させて貰うぜい？」

十話め。顔がよければ何でも上手く行くのは漫画だけ。(後書き)

現在試合間近ですので更新は遅くなるかも。。。

十一話め。ボケる内容きつくなってきたね

チラッとバカの集団を見てみると、河合君が満面の笑みで教室を出て行っていた。

……また変なこと思いついたんだろうな。
なんて勝手に予想。

私のチラ見に気づいたのか、瑠衣君……だったかな？ 名前までイケメンなんだ……。

そのルイ君が私の方に手を振ってきた。
すぐに視線を逸らす。

視線を逸らしたというのにルイ君はまた近づいてくる。

「あのバカが何か思いついたみたいだぜ？ アゲハちゃん」

「……別に」

私の無愛想な表情にルイ君は困った表情を作るが、スグに笑みを溢す。

「……まー俺はアゲハちゃんが無愛想だろうが別に良いんだけどよ、アイツは嫌みたいなんだよ」

「……迷惑」

一言しか溢さない私にまた表情が強張る。

……これが普通の反応ね。河合君がオカシイのか。

ルイ君はスグに元の笑顔に戻ったけど、今度の笑顔は作り笑いじゃなく、もつと親しみのある表情を向けてきた。

「馴れ馴れしくして欲しくないんだけど……君も河合君も……」

「ま、まーそう言うなって 俺は兎も角……アイツはバカだからよ、なんも知らず人の心ん中を土足で入ってきやがる。誰もが見て見ぬふりする闇があっても、誰もが同情して触れない想いがあっても、アイツは気にしねエ……思いつきり入ってきやがる、バカだからよ？」

「……………」

まるで自分がそうだったかのような言い方。

ルイ君と河合君の馴れ初めなんて知らない。

「……」
「……それが私と同じ様に彼が話しかけてきたから始まったからと
ただけど、きつと思いがあつたからこそ、彼はそんな事を私に口走
つたんだとおもう。」

「……」
「……それが私と同じ様に彼が話しかけてきたから始まったからと
か。」

だからといって私にはどうとも思えないけれど。

冷たいとかじゃなくて、心の底からどうでもいいの。

「……………」
「……いや、忘れてくれ」

私の表情を見てルイ君は珍しく慌てた表情を作っていた。

「取り合えずアイツの茶番に付き合ってやってくれよ」

「……………」
「嫌よ」

私の否定的な言葉を聞いても、ルイ君は「そりゃそうだ」と小さ

く溢して肩を竦めて見せるだけだった。

……ルイ君も私を拒絶しないんだ？　こんだけ冷たくしてるんだけど。

何だ君もバカじゃん……河合君と一緒に。

そうしていると、教室のドアが何か騒がしいことに気づいた。

「ほれ、バカ王子が帰って来たぜ？」

ルイ君は騒ぎの様子が解ってるらしい。

私にニタリ、と何処か見たような笑みを向けてくる。

類友って言うんだっけこういうの。

小さく溜息を溢すとドアの方に視線を向けた。

………某ロボットアニメのコスプレをしている河合君がいた。
使徒とか出てきそうなコスプレなアレ。

制服じゃ無くてあのパツンパツンで頭になんか角みたいなの
つけてる方の格好。

っていうかパイロットスーツ。

っていうか ラグスーツ。

え、待って私が無愛想だからとかそんな感じでチヨイス？　先が
読めるボケって痛いんですけど。

あ、筋肉バカも協力してるらしい。

河合君の後ろで使徒のコスプレしてる筋肉が居る。

ダイヤの形してコオーとかクオーとか口で言っている。
なりきってる……。

呆れるを通り越して私の脳は一瞬処理落ちしてしまう。

「……俺がさっき褒めたのに、ことごとくソレを無視しやがるなあ
のボケナスは」

友人であるルイ君がものすごい友達に向けるものでは無いような
視線を向けている。

幾ら類友でキツイもんはキツイらしい。

何かしてくるのはわかっててもあそこあまでバカっぽいことをす
るのは予想外だったらしい。

というか、さっきの褒めてたんだねルイ君。

褒めてたとは思えない発言だったけど。

寧ろいつも通りバカにしてる感じが変わらず。

河合君はというと、ドヤ顔で突っ立っているから余計に腹立つ。

十一話め。ポケる内容きつくなってきたね(後書き)

っていうかエヴァ ゲリオンです。

元ネタ解らない人コメントサイ……orz

十二話め。元ネタが解らない人ゴメンナサイ

「……………」
さつきまで馴れ馴れしかったルイ君がさり気なく距離を置いてる。

『ギャグに付き合ってたやれ』とか言ってたくせに恥かしいネタには関わりたくないらしい。

ルイ君は良い性格してるよねホント……………。

ルイ君は絶対酷い死に方するだろうな……………後ろから刺されそう、とか考えてるうちに河合君が動き出した。

私の方に必死な感じで走ってくる。

私の手前で止まると何かを両手で架空を掴んだ素振りを見せて、回そうとする。

「ぐ、ぐわあああああ！！！！」

演技に熱入ってる……………寧ろ手に熱入ってるって印象？

某作品の有名なワンシーン。あれ、そういえばあのシーンって無愛想クローンの一言が必要なんじゃ……………私にノレって言うの？っていうかそれって思いつきり雰囲気ですわせようとしてない？

そうこうしてるうちに手を火傷（の演技）をしながら河合君はなんとか開けたらしい。

「アヤナミィ！」

あ言っちゃったよ……………凄い演技だよ河合君。

頑張ってたとか言ってた私の努力投げっぱなしジャーマンだよ。私を確認した（設定）後、険しい表情だった河合君の表情はほこ

るんだ。

「良かった……」

何が良かったんだろう。

私は怪我也ダイヤ型からのビームを防いだりしたわけでもないんだけど。

「……」

「……」

私と河合君の間に無言が流れる。

明らかに期待した瞳で私の台詞待ちな様子。あやなみ

そんな私達の様子を見守っているクラス一同。

淒く目立ってる、淒く止めて欲しい。

期待の視線が淒い。

え、何？ 私に言えって言うの？

……。

『アイツの茶番に付き合ってくれよ』

ルイ君の台詞が脳裏に過ぎる。

茶番、か。

一度だけ。

「えっと……こういう時、どういう顔をすればいいかわからないの

……？ だっけ……」

私がそう言った瞬間、河合君の表情にツパーと笑みが広がる。

「笑えばいいと思うよ……」

凄くしてやったりな笑顔で河井君はそう言った。

「……」

「……」

冷たい瞳で見つめる私と、無言のプレッシャーに弱いのか笑顔がひきつってきている河井君。

「……っ、つづきは？」

無言に耐えられなくなったのか河井君が小さく溢しながら促す。

「……」

そんな私は無言のまま視線だけ送る。
続きを知らないわけじゃない。

ダラダラと冷や汗を流している河井君は続きを促している様子。

……っ、ってゆーか。

「笑うわけないじゃない」

そう言っておもいつきり机を蹴った。

机は勢いよくスライドし、最初の時のように河井君の……部分に激突していった。

「ふっぼら……」

面白い声が出た。

「使徒からの攻撃！（男の）中心部を直撃！！活動限界です！！もうこれ以上持ちません！！」

「やらせる……」

「で、ですが……！」

河井君の後ろの方で筋肉君がナレーターから鬼畜パパまで一人でコスプレしながら一人芝居を続けている

……筋肉君凄いな。

「プ、プラグスーツは防御力0と、か、変わらなくて……」
何か小さく溢してる河井君。

「河井！！停止します！！」

筋肉君は河合君が必死なのも無視して相変わらずノリノリである。

「逃げちゃダメだ……逃げちゃダメだ……逃げ、ちゃ……イヤ無理……」

河井君は最初の時と同じように、バツタンと倒れた。

私はそんな河井君を無視して立ち上がる。

なにこんな奴らに乗せられてるのよ……………私は。

先程の乗ってしまった自分に苛立ちを覚える。

沢山の人の視線を感じる……………。

私は急いでその場を後にしようとしてドアに向かった。

気分が悪い……………もう帰ろう。

「やればできるじゃん」

後ろからのイケメン君のからかうような声が聞こえた。

無視だ。無視。

私に関わらないでよ。

幽霊みたいに扱えばいいじゃない。 本当に……………なんなのよ。

十二話め。元ネタが解らない人ゴメンナサイ（後書き）

いやもうほんとゴメンナサイ…m（）。—（）m

十三話め。ネタ切れヤバ目。ストーリーカーでGO！

「おい、河井起きろー」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

折角いい寝心地なのに起こすんじゃねーよ……。

「うるせー……暴走して食べちゃっぞコラ、おいしく俺の糧にされ
たくなけりゃ起こすんじゃねー」

「いいから起きろって」

……ったく、なんなんだよ。

めんどくさい気持ちもありながらも顔をあげてみた。

そこにいたのは。青いダイヤ形から顔を出した筋肉だった。

少し間が開く。

「や、八島作戦ンンンンンンンンッ?!」

取り合えず最初に浮かんだ突っ込みはコレだった。

ていうかバツチリ目も覚めたわ。

「あん？ レイちゃん毎溶かすビーム撃つぞコラ」

ダイヤから顔を出している筋肉がヤンキーちっくにガン飛ばして
来る。

いや、何かシュールねこの絵。
というかよく出来たダイヤ形なのにどうやって立ってるんだろうか。

「あの子今日は保健室行った後に帰っちまっらしーぜ？」

そんな言葉を掛けて来たのは筋肉とは別の方向から。

この声はイケメンだな。

そちらに目を向けると……いつもは素敵なセットをしている髪の毛を後ろで束ねていた。

だが男なのでちょびつと出ているだけ。

「……解り難いコスプレしてんじゃネーよ！ アレか！ モテルからの意味合いでカジさんかコラ！ だったら俺はお前を許さない！ スイカ畑に埋めてやるからな！！」

「……？ お前何言ってるの？ 後ろ縛ってみたのは只の気分転換だけ」

「……」 素の勘違いで結構恥かしい。

「俺お前らのそういう思考解らないんだよね……」

なんかかつこよく髪の毛を掻き揚げながらさり気なくオタクを否定してやがる。

イケメンだとエヴンゲオンも見ねーのかよ！！ 国宝アニメだゾあれ！！

イケメンの後ろの方では「キヤー私達の王子が後ろ髪縛ってるわー！ 素敵ー！」とか騒いでいるので奴等に威嚇のポーズでもしてストレス解消。

「こつち見るんじゃネーよ！ バカ河合！ ボケ！ 殺すぞ！！」
逆にストレス溜まったよ！？」

俺とイケメンの差はなんなんだ。なんで俺ん時はこんなにボロクソに言うんだ！？

……アア顔か。

「おい筋肉、あそこのお嬢様達がお前のコスプレについて語りたいたいよ」

筋肉出撃。

「へい彼女達！ 食べられた使徒が何味だったか語らないかい？
断然俺は刺身ぽかったと」

ダイヤ型なのでピヨピヨと器用に跳ねている。

「キヤー！ 筋肉バカがダイヤみたいいな形でわけ解らない事言いながら近づいてきたわー！ 誰か撃ってー！ ビーム砲撃ってー！」
筋肉から散り散りに女達が逃げていく。っていうか知ってんじやん。

「で？ あの子保健室行って早退でもう帰っちゃうんだとよ、先生がさっき荷物持ってってたし」

イケメンが筋肉を総スルーして話を戻す。

そんなに俺のコスプレが酷かったのか？ 保健室行く程って素で凹んで良いか？

「……マジかよ、また明日までにネタ考えないと、そろそろマジでネタ切れだつてのに」

頭を抱える俺にイケメンは考える素振りを見せる。

「そつだなアもっと相手の事知らなきゃ行けねーんじゃねーのか？」

「知る？」

首を傾げるバカな俺にイケメンは態々説明をしてくれる。

「だってお前、アゲハちゃん的事なんも知らねーだろ？ ちょっとは探ってみたらどうだ？」

「……ソレだ！」

イケメンの言葉に俺の中の何かが弾けた。

やはり情報が足りなかった！ 奴の事を隅々まで調べて一からネタ作りに励もう！！

「よっし！ それなら早速尾行だ！！ 俺も早退すつから先生に適当に言つといてくれ！」

「おー、頭が破裂したとか適当に言つといてやるよ」

「もうちょっとマシな言い訳無いの！？」

突っ込みを返してから俺は走り出す。

後ろから「それストーカーって言っただゾー捕まるなよー」とか何とか、最後の方は聞こえにくかったな。ストッキング？ ああ大好きさ！

今は急いで幽霊娘に追いつこう！ あの女は本当飽きさせない。

十三話め。ネタ切れヤバ目。ストーカーでGO！（後書き）

試合終わりました入賞です。
私、頑張りました。

十四話め・派手めでギャルめ、俺には苦手め

あの後、体育教師を振り切ったりと大変だった。

……明日殺されるな確実に。

どうやら幽霊女には何とか追いついたようだ。

現在幽霊女は信号を待っている様子。

……幽霊のクセに律儀だなア。

今俺の隣を通って言ったおばちゃん集団が凄い怪訝に見てきた。

何だ電柱から女の子の様子を伺ってるのがそんなにおかしいのか
オバチャン達め。

うお、動き出した。

オバチャン達の事は無視して機敏に動いて見せる。
先程から周りの視線が痛い感じがしない。

しかしあの女、どこも道草しねーな。

情報集めになりやしねー……これじゃ只の女の子追い回してる変
質者じゃねーか、ってどっちにしても変質者だろ！

……。

……クソ、一人でボケと突っ込みつて寂しいな。

あまりにもイベントを起こさない幽霊娘に半ばイライラしてきて

しまう。

しかし歩くのおせーな。

そのまま10分程歩き回っていると、幽霊娘が立ち止まった。

何かを見ている……？

幽霊娘の視線の先を見てみると、その先に一人の女が居た。

妙に派手な格好の女がいた。

多分俺達と同じ年くらい。

多分と言ったのは、服装は派手なセーラーだが化粧がいように濃いからだ。

何だあのケバい女は？

派手な化粧には距離を置きたくなる。

あとチャラチャラとアクセサリーやら高そうなカバンやら……なんだ髪の毛まで金ぴかかでどんだけ派手になりたい女なんだ。

派手な女はニヤニヤとしながら幽霊女に近づいていく。

幽霊女はいつもの無表情なままだが、何となく固まってるんじゃないかと予想。

何か喋っている。

流石に遠くて何喋ってるか不明だ。

折角のイベントだってーのに！ クソー！ 近づくか？ 近づいてみるか？

上から物を言うような様子の派手女に幽霊女の無表情は変わらな
いが目つきが冷めた視線だ。

どつやら穏やかな様子では無いらしい。

しかしあの派手女スゲーな……幽霊娘のあの視線無視して喋ってやがる。

俺だったらあの目で見られたら固まるけどなー、正に蛇に睨まれた蛙……蛙!? 蛙って俺か!?

自分で考えて自分が爬虫類部類に考えていた事に勝手にショックを受けてしまう。

そんな事を考えているうちに幽霊娘が動き出す。

まだ喋っている様子の派手女を無視して幽霊娘が歩き出していった。

「ちよつとオ! 待ちなさいよオ!」

派手女が大きな声を挙げたのが聞こえた。

何何だアイツはア?

結局話も聞こえなかったわけだし……

ま。いいや。

先程と同じ様にそそくさと後を追う事にする。

その時、派手女とすれ違ったので軽くご挨拶。

「あんちゃ〜っす」

どうせ二度と会わないだろう、だから適当な挨拶でモーマントイ。

「……待ちなさいよ」

話しかけられちゃったよ。

「ンだよ俺忙しいンだよ、サインなら後でお願い」

「はア？ 意味解らないんですケド」

……俺のギャグが理解出来ないだけでお前苦手キャラ確定。コツチが意味わかんないんですケド。なんですケド。

「アンタ……アゲハの知り合い？ 何してんのよ」

「俺はアイツのクラスメートだよ。そういうテーマは誰でアイツとどういう関係だよ」

「アタシ？ アタシはアイツの元クラスメートよ」

な、何！？ こんな所に謎少女の情報源が！ これは話を聞かなくては！！

十四話め・派手めでギャルめ、俺には苦手め（後書き）

イルカとクジラの違いは実はサイズだけ。

トリービー（ry

だとしたらクジラの脳ってどんだけ小さいのって話よね。

十五話め。笑顔は大好き。お前の笑顔は嫌い

「いやー。先程は失礼な態度をもうしわけありません、差支えなければあの女の事教えてくれませんかエ？」

突然の俺のキャラの変動になにやらドン引きしたような表情をしているがソコはスルーしておこう。

「何なのよ気持ち悪いわね……にしても……フーン、アイツまだ学校通ってたんだー……」

意味深な言い方に少し首を傾げる。

「……なんだよ、どういう事だよ」

「いいわよ？ アタシも今丁度ムカついてたから愚痴程度に話してあげる」

お前の派手過ぎる化粧と無駄に高そうなバッグの方が気持ち悪いですケド。口には出さないけど……。

「アイツさー……自分の事を幽霊とか言ってるでしょ？ それで苛められてたのよ。最初は普通だったのに突然そんな事言い出すからさー！ もうクラス中で団結してイジメ始まってエ」

そこから聞いた話は。

楽しくなかった。

笑えなかった。

俺の嫌いな内容だった。

タダ女は嬉しそうに楽しそうに前の学校でアゲハが苛められていたことを喋った。

何をしてても反応が無い、それは本当に幽霊のようで薄気味悪かったとか。

キモチワルイ？ そんな言葉嫌いだ。

キライだ。 楽しくねエ。

「……っへー」

話を聞いていて俺が最初に出た言葉は間の抜けた声だった。特に感情が出るわけでもなく、ただただ無関心に。

「アンタも近づかない方がいいわよオ？ 気持ち悪いのがうつるか
らさーキャハハハ！！」

ああ、いるんだな。

お前みたいなの。

笑顔は好きだ。けどそんなんで笑った汚い笑顔はドブよりも薄汚く思える。

ん、んーんー。

イカンな珍しく俺がシリアスな気分になっちゃったよ。
ノンノン！俺はこうなのじゃねーよ。

「……それはそうとお嬢さん、とても高そうな服を持っていますな
？」
気分を変える為に派手女に話しかける。

「あ、あらア？ アンタ解ってるじゃない！ これは有名なバタフ
ライっていうメーカーのブランドなのよ？ 十数万はするかしらア
？」

おしゃれな感じでバタフライの字が英語で、金色の刺繍で派手に
入っている。

自慢げな様子なギャルに凄い無表情なまま俺は言葉を続ける。

「ほアーバタフライ？ すごいすねー！ 良ければ手にとって見
せていただけませんか？ 美しいお嬢さんは手に取る事は出来ませ
んがせてソレに見合う高価なカバンを是非に……」
服従のポーズで両手を差し出してみる。

「……フ、フウン？ 良いわよ少しだけ触らせてあげる」
俺の下からの行動に妙な優越感に浸っている様子。
俺の手の上に高価カバンが置かれる。

結構な重量感。

そりゃそうか、財布やら携帯やら色々入れるもんあるもんねえー！

「ほおー、これが、ほおー……」
無感情だった俺の瞳が突然燃え出す。
カバンを持っている手に力が漲る。

「おおおおおーっとおオオオ！？ 手がアアアダイレクト

に滑ったあああああああ！？」

叫び声を挙げながら思いつきりカバンを空中へとブン投げる。
宙に舞うカバン。

思いつきり力入れたので思いつきり飛ぶ。

顔がみるみる強張っていくギャル女。

「な、なにしてんのよオオオオオオオー！！！」

悲鳴を挙げながら慌てて飛んでいくカバンを追いかけている。

その後姿に俺は中指を立てて思いつきり悪態を吐ける。

「ぶわーかぶわーか！！ そのバタフライのスペル、Bが逆向いて
んじゃねーか！！ それニセブランドだよバーカ！ 何が数十万だ
！！ ギャツハツハツハツハツハツハ！！！！」
消えていく後ろ姿に俺は高笑いを続ける。

「……アレ、本物よ」

「っ！？」

「……ブランド、バタフライはBのスペルが逆向きなだよ」

「え！？ そうなの！？」 数十万ぶん投げた男。

いつからいたのか知らないが、無表情の幽霊娘がそこに居た。

「河合君……こんなところで何してるの……？」

「え！？ あー……いやアー……そのおー……」

流石に貴方の事、ストーキングしてたんです！ テヘッ
とは言えないし。

「ちよ、ちよつと今ギヤルのカバン投げ大会しててさー！ いやあ
ー偶然偶然！ 今回の投げっぷりは新記録達成かなー！ ナハハハ
ハハハハハハ！」

く、苦し紛れ過ぎるだろ俺ー！？ 何ナハハーって笑ってんだよ！
何ギヤルのカバン投げって！ どういう風に記録つけるんだよ！？

「……私の事、つけてた？」

わああ直球！ バレてないと思っていた行動はがつつりバレてた
よ！

つつーか知ってるなら変な言い訳口走る前に言っただけよ
！！

「……」

相変わらずの圧力のある無言が俺に向けられる。

ど、どうなるんだ俺！？ 警察呼ばれたら流石にグッバイだぞ俺

！！ ギヤグの疇子越えますって！！

「……良いよ、私に用事があつたんでしょ？ さっきの御礼にお茶
くらい出す……」

「へ？」

アゲハの言葉はあまりにも以外だった。

それも俺は嫌われていると思っただけだからだ。

バカみたいな顔をしていると、さやかはそんな俺を無視してサッ
サと歩き出した。

慌てて俺は後を追う。

ん？ っていうか。

「お礼って何だよ？」

「……さっきの気持ちが悪くなった」

アゲハはそれ以上は言わなかったが、それでも俺は言葉の意味を理解した。

さっきのって……俺がカバンぶん投げた女の事か。

そこで俺はニヤツと気持ち悪い笑みを浮かべてしまう。

「……何笑ってるの……気持ち悪い……」

アゲハが少し眉を動かして気持ち悪さをアピールしてくる。

それでも俺は表情を崩すことが出来なかった。

幽霊女にも、ムカついたり、スカツとしたりするのが嬉しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2210x/>

くらでれっ！

2011年10月28日02時09分発行